

## 『人間倶楽部』から見えてくるもの

西 田 一 豊

### 1. 『人間倶楽部』について

鹿児島純心女子短期大学図書館には、島尾敏雄展示コーナーがある。そこには、鹿児島純心女子短期大学で教員、図書館長として過ごした島尾の足跡と履歴書などの関連書類や、短大で行った講演会の様子を写した写真とその講演草稿、署名入り限定本などが展示されている。そして、その一隅には「島尾敏雄先生と私たち」と小見出しのついた『人間倶楽部』という手書きの冊子も置いてある。2022年4月に初めて鹿児島純心女子短期大学に着任した私にとって、この手書きの冊子は未知のものであり、どのようなものか気になっていた。図書館の司書の方にお話しを伺うと、かつて生活学科生活学専攻にあった「人間文化コース」で学生が週刊で発行していた冊子で、現在は図書館内に製本所蔵されており読むことができる<sup>(1)</sup>とのことであった。私は時間を見つけて、その製本された『人間倶楽部』に目を通した。以下は、そのごくささやかな感想である。

『人間倶楽部』は昭和61年5月に創刊された学生による手書き印刷の冊子である。創刊号（第1巻第1号）には奥付がないため、詳細な発行日は分からないが、第2号の奥付には昭和61年5月19日発行とあり、『人間倶楽部』が週刊だったことから、創刊号は昭和61年5月12日だったのではないかと推測される。冊子記事の書き手は人間文化コース<sup>(2)</sup>の1年生の学生たちで、三島盛武教官の指導の下に授業「ジャーナリズム実習」

(1) 現在、製本されているのは『人間倶楽部』第19巻第32号まで。以後のものは、冊子体で所蔵されている。

(2) 人間文化コースは当初（昭和61年4月）、家政科家政専攻内に設置されたが、平成元年9月に生活学科生活学専攻への改称を文部省より認可され、以後は生活学科生活学専攻人間文化コースとして運営された。なお、2007年4月より生活学専攻のコース改編が行われ、その結果人間文化コースは2008年3月の卒業生を以って終了した。

において制作されたものである。年度ごとに巻を改め、平成19年3月19日発行の第21巻第35号（通号724号）まで続いており、コース内で発行された冊子として21年間続いたことになる。その持続力には驚くほかない。年間35号前後の号数が発行され、通巻100号、200号といった節目の号は記念号として、しばしば特集が組まれていた。また、こうした「人間倶楽部」の継続性が、『南日本新聞』夕刊<sup>(3)</sup>で取り上げられてもいる。

冊子の記事内容については、『南日本新聞』2003年7月24日夕刊の記事で次のように紹介されている。

現在の一年生は三十人。毎日、B5ノート一ページに興味を持った事柄や新聞記事を読んだ感想などをつづって担任に提出している。その一週間分の中から友人にも伝えたい文章を抜き出し、千字程度にまとめて冊子に載せる。表紙の絵も学生たちが交代で担当する。

より具体的には学生は「ジャーナル」と呼ばれるノートを毎日書き、そこから『人間倶楽部』に採用する記事を選び添削を受ける。さらに『人間倶楽部』発行後には合評会が設けられ、記事内容およびレイアウトについて評を受ける。この過程が「ジャーナリズム実習」という授業のプログラムになっており、2001年度のシラバスでは授業目標として「自己表現した文を二度の添削をへ、公にすることによって、他者からの批判を受け『読める書物』づくりを目指す。」とされていた。この「自己表現」ということについては、人間文化コースの教育目標が「地域文化・人間関係・自己表現をカリキュラムの3本柱」として掲げられ、「文書・口頭による自己表現を高める授業科目」が設置されていたこととも関連していよう。また、『人間倶楽部』については、2004年度の「学校案内」の内、人間文化コースの紹介の中で「『自己表現』とは？」として次のように説明されていた。

「文を書く」ことが好きだという人は若い人の間ではそう多くありません。しかし、現代の社会ではいかに自己を表現できるのかということが求められています。まず何よりも「書き始める」ことで

(3) 例えば「手書き冊子『人間倶楽部』、17年間で600号」（『南日本新聞』夕刊、2003年7月24日）、「手書き冊子『人間倶楽部』が700号突破」（『南日本新聞』夕刊、2006年7月29日）など。

す。

1年次には自分の文章を自分たちで編集し、週刊誌「人間倶楽部」を年間35回発行します。市販の週刊誌と同じ発行形式です。2年次には月刊誌「人間文化」を年間12回発行します。タブロイド版でそれぞれ自分の誌名を決め担当します。1、2年次とも発行とともに合評会を行います。「書く」ことは慣れることです。自分らしさが見つかるにちがいません。

実際に『人間倶楽部』に掲載された記事を見てみると、受講した授業や学校イベントについての感想、好きな映画・小説・音楽の話題、アルバイトの経験、旅行の話題、日常生活でのアクシデント等について、学生の率直な意見・感想が書かれている。例えば、毎年必ず自動車学校へ通い始めた記事が掲載される点などは、まさに18歳の学生が人生上のイベントとして取り上げる記事であり、同様の記事を見つけるたびに微笑ましくさえ感じられた。さらに、新聞記事に対する感想も書かれているが、新聞記事についてよりも多く見られたのはテレビのワイドショーで扱われる話題についての言及であり、これは学生の生活におけるテレビの影響を考える機会ともなった。

『人間倶楽部』の特徴といってもよいかもしれないが、学生が書いた記事には事柄の好悪、不満も率直に書かれてあり、『人間倶楽部』掲載前に添削はあるが、それはあくまで文章としての添削であり、記事内容については学生の責任に任されているようである。この点については他者へと開かれた表現が持つ責任を、学生が学ぶための大変貴重な経験になっていると考える。

こうした文章の責任を学修させることと同時に、授業カリキュラムとしての『人間倶楽部』が特徴的なのは以下のような点でも指摘できるだろう。すなわち、現在の大学教育においても、初年次教育として文章表現は重要視されているが、単に学生に文章を書かせるだけでなく、そこに文章を編集し冊子を作成するという「もの作り」の要素が加えられ、また公開することによって表現のレベルを内に留めるのではなく、他者を意識した表現のレベルまで意識させる点に大きな特徴がある。実際に『人間倶楽部』は学生内の回覧雑誌ではなく、コース内の教職員にも配布され、担当教員以外からも様々な感想が寄せられていたようである。

人間文化コースにおける『人間倶楽部』の意図について担当教員であった三島盛武は次のように説明している<sup>(4)</sup>。

新設の人間文化コースには「文章表現」という科目があり、書く力（表現力）を付けさせたいと毎週『人間倶楽部』という週刊誌を発行していた。学生一人ずつ一ページを（B5版）を担当し、手書きで六百字～八百字の文章を書き公開していた。今ほどパソコンの普及もない時代の話である。この週刊誌をスタッフとコース所属の先生方に配った。学生の関心事や授業についての感想なども書いてあったので、発行を楽しみに待っておられる教職員もいた。

学生にとってこうした作業が、どのような学びの成果としてその後の人生に表れるのかという興味もあるが、少なくとも1年間文章を書き続けるという作業が、文章で表現を行う自信へと繋がっただろうとは想像できる。また『人間倶楽部』の1年を通じて、一つの冊子がどのように生成されていくかということも看取できる点でもおもしろい。毎年度第1号から数号は学生が自由に記事を書いているように読めるが、数号それが続くとか次第に読まれているという意識が学生に芽生え、読者を考えた文章となってくる。そのため、自分の文章についての反省が示された記事が出てくることもある。さらに、『人間倶楽部』という冊子そのものがどのように受け取られるかという、冊子あるいは雑誌の自意識も見られるようになり「特集」という形で特別な編集を施した号が出たりもする。冊子のあり方についての議論も学生たちで行われていたようだ。こうした冊子の生成過程は特に創刊されて数年は顕著に見られたが、年を追うごとに冊子の記事は落ち着きを見せ、それはある意味で冊子生成のダイナミズムの喪失ではあったが、しかしそのために20年という年月の間書き継がれることになったとも言えるだろう。

原稿用紙に単に文章を書かせるだけの「文章表現」の授業を行っている私にとって、『人間倶楽部』が示す文章を書く、書き継ぐという姿に教えられることが多かった。またそれを可能にした授業やカリキュラムに感嘆するばかりであった。では、次に『人間倶楽部』に掲載された記事について具体的に見ておきたい。

---

(4) 三島盛武『身近に見た島尾敏雄先生』（2022年9月、時代屋書房）。

## 2. 紡がれた時間

まず、私自身が関心を持つきっかけとなった島尾敏雄と『人間倶楽部』についてまとめておきたい。島尾敏雄が鹿児島純心女子短期大学に非常勤の教員として教壇に立つのは<sup>(5)</sup>、昭和44年度（昭和45年3月に琉球文学について集中講義を行う）からである。それ以前に鹿児島大学で講師をしていた田中仁彦の紹介により純心短大で講演会を行ったようである。また、娘のマヤが鹿児島純心女子中学校へ入学したこともあり島尾と純心学園との関わりは深まっていた。島尾自身は純心短大で教員となる経緯について次のように書いている<sup>(6)</sup>。

どうして私は、教員の素質の欠落を知悉しながらも純心短大での非常勤の授業を拒み得たろう。だから昭和四十四学年度から私の集中講義がはじまったわけなのだ。年に一度私は名瀬から連絡船に乗り、娘の居る鹿児島の純心学園にやってきて、その内部に住みこみ、一週間足らずではあったが、講師生活の経験を繰り返すことになった。やがて指宿に転居したこともあって、五十一年度から遂に常勤の勤めをすることになった次第である。

島尾はその後昭和52年に茅ヶ崎へ転居しているが、その間も純心短大の専任教員であり集中講義を行っていた。再び鹿児島へ戻るのは昭和58年で、晩年は鹿児島市宇宿に居住していた。島尾が人間文化コースと関わりを持つのは、人間文化コースが新設された昭和61年で、島尾は「南島文学」の授業を行う予定だった。だが、実際の授業は行われることはなく、昭和61年11月12日出血性脳梗塞で亡くなっている。

『人間倶楽部』が島尾の追悼号をだすのは、第1巻第20号と第22号<sup>(7)</sup>でそれぞれ「島尾敏雄先生と私たち」（第20号）、「島尾先生と私たち その2」（第22号）と表紙にタイトルが書かれている。20号の書き手は人間文化コースの学生たちで、入試で面接官だった島尾の印象から、入学後の島尾との関わり、そして受ける予定だった「南島文学」の授業を受けられず残念な思いでいることなど書かれており、文学者島尾敏雄とは異なる教員としての島尾の姿を垣間見ることができる。また第22号は

(5) 以下、島尾敏雄の年譜的事項については島尾ミホ・志村有弘編『島尾敏雄事典』（平成12年7月、勉誠出版）、注4三島盛武『身近に見た島尾敏雄先生』を参照した。

(6) 「純心学園の思い出」（所収『南風のさそい』昭和53年12月、泰流社）。

(7) 発行の日付は、第1巻第20号・22号ともに昭和61年11月29日となっている。

島尾の授業と関わりのあった人間文化コース以外の専攻の学生、教職員による島尾の追悼となっている。これら追悼号で特に印象に残るのは、島尾が次年度の短大パンフレットに掲載する写真撮影を人間文化コースの学生二名と行った際のエピソードである。パンフレットの撮影は11月6日に行われている。

十一月六日、木曜日のことでした。来年度のパンフレットに島尾先生と人間文化の学生二名との写真を載せるということで、そのための撮影があったのです。私は島尾先生と、こんなに近くでお話しするのは勿論初めてでした。緊張気味の私達二人でしたが、楽しそうに話している写真を撮りたいということで、先生と少しお話をしました。『人間文化に入って、どうですか。』との問いに、『思ったとおりのところでした。』と私達が答えると、『思った通り、つまらない?』と冗談を言って笑わせてくださいました。

今になって思うと、ドキッとするようなことを、その時先生は私達に言われたのです。私達が『このパンフレットは来年度のものだそうですよ。』と言うと、先生は対岸の桜島を眺めながら『僕はこのパンフレットが出来る頃まで生きていられるかなあ』と。いつもの笑顔でボソッとおっしゃった先生の言葉が、今でも頭にこびりついています。

これが、私にとって、先生との最初で最後の思い出となりました。大切な大切な思い出です。

上記の引用<sup>(8)</sup>はある学生の島尾の追悼文である。ここにあるように次年度のパンフレット撮影は学生二人とともに行われたが、上記の学生の他にもう一人の学生も同様のエピソードを『人間倶楽部』に掲載している<sup>(9)</sup>。島尾は昭和61年9月以降、心臓病に伴う体調不良が続いていたため、思わず弱音が出たのかもしれない。あるいは、学生を和ませようとする一種の冗談だったかもしれないが、その6日後には現実になってしまったのである。このエピソードは、島尾敏雄の最晩年の一コマを示す貴重な証言となっている。もちろん、こうした挿話だけでなく、図書館

(8) 「最初で最後の島尾先生」(『人間倶楽部』第1巻第20号)。なお本稿では、『人間倶楽部』掲載の記事に署名された氏名は省略した。

(9) 「思いでの写真」(『人間倶楽部』第1巻第20号)。



での島尾の姿や授業後の学生とのやりとりといった短大で教員として働く島尾の姿がこの追悼号には多く掲載されている。こうしたささやかな挿話も、生活人としての島尾を浮かび上がらせてくれる貴重なものであるといえよう。

さて、『人間倶楽部』に掲載される記事は基本的には学生のその時々に関心のあるものになるのだが、島尾以外にも文学者について書かれた記事もある。例えば、鹿児島県立図書館で図書館長を務めていた椋鳩十についての追悼文が第2巻第30号に掲載されている<sup>(10)</sup>。この記事では病院で偶然に椋鳩十と出会い、その後椋の童話を「むさぼり読む」ようになったことが書かれている。これも鹿児島ならではの作家と読者の一つのエピソードであろう。さらに、純心短大で行われた小川国夫の芥川龍之介についての集中講義の話題や、田宮虎彦、一色次郎の死についての記事も『人間倶楽部』に見ることが出来る。また、人間文化コースが文章表現を重視していることもあり、現代作家の新刊情報や作家に対する印象といった記事も多く掲載されている。例えば、林真理子や村上春樹、景山民夫、吉本ばなな、赤川次郎、内田春菊、乙一といった作家の小説の感想がある。こうした作家の小説はその時々の小説の流行を示すが、三浦綾子の小説は時代を問わず読まれている印象であった。

ただし『人間倶楽部』は文芸誌寄りの編集ではなく、あくまで学生とその当時の関心事が記事になっている。そのため、上述したように学生生活で考えたこと、体験したことが主な記事内容になるのだが、『人間倶楽部』が21年間続いたことから、現在から見ると時代を画するような出来事に対する学生の記事も見ることが出来る。例えば、元号が昭和から平成へ変わる事に対する感想、それに伴う天皇をめぐる報道の問題、消費税の導入、ソ連の崩壊、前年の日照不足による平成の米騒動、阪神淡路大震災、オウム事件、プリクラ・携帯電話の普及、ダイアナ妃の死去、山一証券の廃業、就職難の時代の到来、北朝鮮による拉致事件、新潟県中越地震、愛知万博の開催と、具体例を挙げれば他にも多くあるが、こうした昭和後期から平成半ばまでの時代史も、学生の声、感想とともに読むことが出来る。『人間倶楽部』の記事の多くがニュース報道について書かれていることの特徴でもあるが、ある事件・出来事に対して当

(10)「さようなら椋鳩十さん」(『人間倶楽部』第2巻第30号)。

時の若者がどのような感想を抱いたかを知る一つの参照例となっており、これも現在では貴重なものと言えよう。

さらに加えて、鹿児島県の時代史にもなっていることも指摘しておきたい。サザンピア21に行った感想、FM局の開局、高校野球甲子園大会での鹿児島県勢の躍進、いおワールドかごしま水族館のオープン、スカイマークの鹿児島空港就航、西鹿児島駅の改称問題、アミュプラザ、ドルフィンポートのオープン、ジャングルパークの閉園といった刊行期間中に起こった鹿児島での出来事を学生目線で知ることができる。特に平成5年8月のいわゆる8.6水害についての記事は、実際に学生が当事者となっており、水害の生々しい様子が書かれている。当日天文館にいて、交通機関がすべて運行停止になるなか、数時間歩いて自宅に帰った学生や、流された石橋の様子を見に行った学生など、8.6水害の記事は当日の被害の大きさを如実に語っている。また、水害から時間が経っても8月になるとこの話題が記事になることがあり、当時幼かった妹を連れて親戚の家まで必死に避難した学生の記事など大変印象に残った。

『人間倶楽部』はその当時の学生の思いが詰まった冊子であるだけでなく、その思いを通じて当時の時代史、世相もまた見えてくるのである。

### 3. ある「自分史」

私はこの『人間倶楽部』という冊子を、島尾敏雄への関心から読み始めた。だが、21年間の冊子を拾い読みしているうちに、心に残った学生がいた。そのことについて最後に記しておきたい。その学生が『人間倶楽部』の記事を書いていたのは平成5年度の第8巻である。学生については以後、掲載名であるRさんと呼ぶ。Rさんの記事は他の学生と明らかに異なっていた。なぜRさんの記事に関心を寄せたのかというと、他の学生の記事が授業のこと、学校行事のこと、日常での体験談、芸能界の話題といったものであるのに対して、Rさんが永井路子のブックレビューをしていたからである。それも永井路子の『新・歴史をさわがせた女たち』のブックレビューであり、他の学生が取り上げなさそうな書籍を取り上げている点に目を惹かれた。そのほかRさんが取り上げる話題は、歴史について、映画についてなど、他の学生があまり話題にしない記事が多く、レビュー対象の作家も古井由吉、筒井康隆など他の学生



と一線を画していた。そんなRさんの記事の中で特に目を惹くのが、Rさん自身の自分の文章についての記事である。自分の文章といっても、『人間倶楽部』に掲載する文章についてではなく、『南日本新聞』紙上の十代の読者向けの投稿欄である「若い目」へ投稿した文章についてである。Rさんは新聞への投稿を通じて、自分の文章と真摯に向き合っていた。Rさんがこの話題を出し始めるのは第8巻第2号<sup>(11)</sup>からである。

五月二日の朝、私はいつものように新聞を見ていた。五ページ目にきた時である。ふと私の名前に目が止まった。南日本新聞の「若い目」という欄である。三月三十日に原稿を送り、四月二十八日に新聞社から載せるという連絡を受けていた。それだったのである。私はその場で「やった!」と叫んだ。初めてのことだったので載るまではどうにも落ち着かなかった。しかし、これでようやく安心した。

この投稿を皮切りにRさんの『南日本新聞』「若い目」への投稿記録が続く。第8巻第9号<sup>(12)</sup>では二回目の掲載の報告があり、第15号<sup>(13)</sup>ではその年の8.6水害で流された石橋についての投稿が掲載された報告がある。この15号では「はたして、私の文をどれだけの人が読んでくれただろう。そしてどんなことを思われただろう。」と読者の存在がおぼろげながら意識されはじめている。第16号<sup>(14)</sup>では黎明館で行われた展覧会の感想が新聞に掲載された報告で、ここでは記事の内容の正確さ求めるため2度展覧会を訪れたことが記されている。自分の文章に対する責任感が生じているのは、やはり新聞掲載が前提のためだろう。また、「読む側は楽だが、書く側は常に頭をひねらなくてはならないことをよく感じた。私はこれからも投稿し続けると決めた。まだ書きたいことはいっぱいある!」とRさんの作家性の発露も読むことができる。この間、教員、知り合いからの励ましの言葉ももらい、いよいよやる気に満ちたRさんの姿を記事にしているものもある。第18号<sup>(15)</sup>には五回目の掲載の話題が載り、文章を彫琢することの苦心が書かれる。この号の記事末

(11)「ネームアビール」(『人間倶楽部』第8巻第2号、平成5年5月17日)。

(12)「二回目の投稿」(『人間倶楽部』第8巻第9号、平成5年7月5日)。

(13)「四回目の投稿」(『人間倶楽部』第8号第15号、平成5年9月17日)。

(14)「五回目の投稿」(『人間倶楽部』第8号第16号、平成5年9月17日)。第15号と発行日が同日だが、奥付の記載に従った。

(15)「六回目の投稿」(『人間倶楽部』第8号第18号、平成5年10月11日)。

尾には「それにしても、今までどんな種類のお便りコーナーにも出すことはなかった私が、今年は思わぬ変貌である。」とあり、短大生になり文章を書き新聞への投稿を通じて、自分の変化・成長へと繋がった様子が書かれている。そして、第23号<sup>(16)</sup>では篠原一の『文学界』新人賞受賞の話題に触れ、自分の幼い時からの願望である物語を作ることへの思いが吐露された後、物語を作る人になるべく「たえず努力したのちに応募すべきだと思い直した。」との決意が語られる。

そして、こうしたRさんの努力は二つの形で結実する。一つが「第15回文庫による読書感想文コンクール」一般部門最優秀賞受賞<sup>(17)</sup>であり、もう一つが黎明館の発行する『黎明館だより』への原稿依頼である<sup>(18)</sup>。特に後者は、Rさんの新聞投稿が生んだ縁であり、Rさんが自分の文章を通じて世界を広げていく様子が、Rさんの感動とともによく伝わってくる。Rさんの『南日本新聞』「若い目」への掲載も1年間で10回を越え、次第に反響も出始める<sup>(19)</sup>。

最近、親戚や知人、近所の人々から「いつも見えますよ。」と声をかけられたり、電話が来たりすることが多くなった。全く知らない人からも「いつも楽しみに見てるんですよ。」と声をかけられたので驚いてしまった。一月九日は父の祥月命日で、その当日に父を偲ぶ内容が載った。これは今までのうちで最も反響が大きく、母の知り合いの方が「今日の文を読んで私は泣いてしまいました。」と電話口で本当に泣きながら喋っておられたほどだ。特に私の親戚は当時を思い出して泣いたという。

一つの新聞投稿から始まったRさんの1年だったが、Rさんの成長には目を見張るものがある。Rさんは文章の彫琢を続け、遂には読者の感情を揺さぶるような文章を書き得ようになっていた。それはこう言ってもよいかもしれない。Rさんこそは『人間倶楽部』の生んだ一人の作家だったのではないだろうか。私はRさんの紡いだ一年間の「自分史」

(16)「十七歳の文学界新人賞（並びに私の心境）」（『人間倶楽部』第8巻第23号、平成5年11月22日）。

(17)「感激の吉報～作文コンクール入賞～」（『人間倶楽部』第8巻第24号、平成5年12月6日）。なお「文庫による読書感想文コンクール」は角川書店が主催のコンクールで、地方大会で優秀な成績だった作文は全国大会へと進んだ。Rさんの受賞は、鹿児島県での最優秀賞ということになる。

(18)「黎明館からの原稿依頼」（『人間倶楽部』第8巻第25号、平成5年12月13日）。

(19)「投稿文掲載十一回目」（『人間倶楽部』第8巻第29号、平成6年1月17日）。

『人間倶楽部』から見てくるもの

に心を動かされた。文章を作ること、その文章で世界が広がること、文章がRさんの人生にもたらす幾つかの奇跡と、幾つかの蹉跌。Rさんは文章を作ることの苦心と喜びを、『人間倶楽部』に真摯に書き綴っていた。今、Rさんが何をされているのか私は知らない。だが、30年の時間を経てもなお、『人間倶楽部』に残されたRさんの文章に向かう直向きさは色褪せてはいない。

島尾敏雄に惹かれて読み始めた『人間倶楽部』だったが、『人間倶楽部』は21年間の学生の思いが詰まったタイムカプセルだった。一人一人の「自分史」がそこには刻まれている。

(本学准教授)

